

フィンランドでの出産

(1) 充実した社会保障制度

海外出産・育児コンサルタント

Care the World 代表

ノーラ・コーリ

フィンランドと聞いて皆さんは森、湖を思い浮かべるでしょうか。それともムーミンの世界を想像されますでしょうか。このたびフィンランドの首都、ヘルシンキを訪問する機会を得ました。そして、そこで私が目にしたフィンランドは想像以上に男女がわけへだてなく、尊重される国でした。そしてそれはお産にも反映されていました。赤ちゃんを産むのは実際女性ですし、お産というと女性中心と思われがちですが、フィンランドでは決してそうではありません。むしろ赤ちゃんの誕生をパートナーはもちろんのこと、社会全体で迎え入れているという印象を受けました。それでは具体的にフィンランドでのお産はどのようにこの国の未来を支えているのでしょうか。

【 お産を支える制度 】

フィンランドでのサポートシステムは現地の人、外国人を問わず、お産を迎えるものにとって安心だと強く心に残りました。どのような問題に直面しても誰かに相談すれば必ず答えが得られるのがここでの制度です。たとえ日本から来てまもない状況でも孤独感は少ないでしょう。

お産は地域の保健所がかなめとなって家族をサポートします。駐在員を含めて、税金を納めているものであれば、皆、平等にサービスを受けられます。しかも保健所でのほとんどのサービスが無料です。しかし、さまざまな手続きが必要です。

1. 妊娠前に住民登録をして、国民番号を申請する。このソーシャルナンバーをもとにいろいろなサービスが受けられる。
2. 妊娠がわかったら、ドクターに出向き、妊娠証明書をもらう。
3. ドクターは妊婦の住んでいる地区の保健所を紹介してくれるので、ドクターからもらった妊娠証明書をそこに提出する。
4. 保健所でお産を専門とする保健師あるいは助産師が割り当てられる。この担当者が妊娠中のケアから産後のケアまで一貫して診てくれる。ただし、お産の時は病院勤務の助産師が担当となる。

このようにサポート体制が万全であること、衛生面、設備面でも問題のないこと、日本へ帰る距離などを考慮すると、ほとんどの方々が現地での出産を選んでいきます。

【 ことばの問題 】

日本人にとって、ことばの問題はフィンランドでお産を迎えるにあたって大きな不安要素であると思います。フィンランドには二つの公用語があり、それはフィンランド語とスウェーデン語です。英語は残念ながらあまりポピュラーではありません。そのため、英語を話す人や英語で書かれたパンフレットは積極的に探し求めないと見つからないでしょう。出産準備教室も英語でのクラスがあるかどうかは聞かないと教えてくれません。ただし、多くの人はとても親切で協力的です。なんとか助けたいという姿勢をもっているのです、つたない英語でも一生懸命説明してくれます。

フィンランドには難民、移民を含む多くの外国人が移住しています。そのため、保健所では通訳のサービスをアレンジしてくれますので、サービスが得られるかどうかを尋ねてみてください。通訳派遣センターによっては、急であっても、週末や夜間であっても対応してくれることがあります。中にはフィンランド人の友人を通訳として連れて行った人もいました。

【 医療保険 】

フィンランドの公的保険はしっかりしているので、日本人駐在員家族でもフィンランドで働き、税金を収めているのであれば、公営医療保険制度に加入することができます。それによってお産に関連するさまざまな社会保障を受けることができます。そのため、あえて民間の医療保険に加入しなくてもよいのではないかという意見もありました。

さまざまな手当てがフィンランドの社会保険庁事務所、Kela (Social Insurance Institution of Finland) の決定によってなされていますので、これらの社会保障を受けるにはKelaの番号が必要となります。このKelaカードは身分証明書にもなるので、あると便利です。このKelaのカードは薬の割引きにも適用されます。

【 保健所の役割り 】

Neuvola (ネウヴォラ) は日本語では、地域の病院付属のヘルス・ケア・ステーション、保健所、保健センターといったところでしょうか。どの自治体にもあります。お産においては、以下のサービスが提供されます。

- ・ 保健師が妊娠中の経過を観察（妊婦健診）
- ・ 妊婦中の記録である健康手帳を発行
- ・ 陣痛の痛みにつわる恐怖心など、メンタル面での悩みの相談
- ・ 育児休暇など受けられるさまざまな手当ての手続きのガイド
- ・ 出産する病院を手配

1回の面談は30分から1時間で、丁寧に行われています。保健師だけで大丈夫かという不安もあるかもしれませんが、妊婦を担当する保健師は助産師としての知識も十分に備えていますし、ドクターとの診察にも定期的に立ちあいます。また異常がみられれば、病院の検査部門を紹介したり、産婦人科医との予約を取るよう勧めます。ちなみに彼らは白衣ではなくて、

普通の服を着ています。



Photo by KAISA RAUTAHEIMO / HS

【 子育て支援の数々 】

日本の少子化問題への取り組みはいまだに改善の兆しは見えていませんが、(出生率 1.43 人 2015 年度) フィンランドも過去に出生率が 1.5 人以下まで下がった時期がありました。今では 1.75 人 (2015 年度)とだいぶ上がってきています。それは市民のニーズに耳を傾け、それに応じて社会保障制度を作り、そのことを市民に伝え、実行に移してきた結果ともいえます。それでは、フィンランドではどのように国民が子どもを安心して産めるように、経済面と生活面でサポートしているのでしょうか。

< 経済面でのサポート >

- 妊娠中に妊婦が受ける給付金 (Maternity Allowance)
- 出産が近づくともらえる育児用品のプレゼント (Maternity Allowance)
- 父親が受ける給付金 (Paternity Allowance)
- 母親か父親が受ける育児休業給付金 (Parental Allowance)
- 母親は生後 1 年近くまでは今までの収入とほぼ同額が支払われる
- 1 年後からは減額はされるが 3 歳までは支払われる
- 家族手当 (Family Allowance)
- 子どもを家庭で育てている場合の家庭保育手当 (Child Home Care allowance)
- 子どもを保育園に通わせた場合の保育援助金 (Child Care Subsidies)
- 子どもを私立のプレスクールに通わせた場合の私立保育手当 (Private Day Care allowance)

このような給付金はすべて Kela から出ます。勤務先とは、基本的には休暇に入る日や出勤する日にちの調整をするだけです。ただし、給付金は収入に応じてだったり、産前のフィンランド居住日数が支給対象として相応かどうかだったり、父親の給付金は母親との同居が必須だったり、給付金を受けるにあたっての数々の条件もあります。

＜ 生活面でのサポート ＞

- 3歳まで自宅で子どもを育てることができる。
- 母親は産前産後の休業がとれる。
- 父親休業がある。
- 親休業がある。
- 会社は産前産後や育児休業を理由に解雇できない。

偶然にも私がホームステイした先のご家族はちょうど3年間の育児休業を終え、3歳を迎える子どもを徐々に保育園に慣らしている時期でした。このようにフィンランドは少子化問題に取り組むと同時に男女平等社会を作ることに専念してきました。国会議員の3分の1は女性というほどです。そして、ほとんどの女性がフルタイムで仕事ができるのも手厚い育児保障制度があってこそだと実感しました。それゆえに出産をするから会社を辞めるというようなことはフィンランドではほとんどみられないそうです。

【 ベビーボックス 】

子どもが生まれるとなるといろいろなものを揃えなくてはいけない、とプレッシャーすら感じます。しかし、フィンランド人はまずは今あるものを工夫して利用する、と考える人が多いようです。そして、なければならないでなんとか乗り切るという考えもあります。

赤ちゃんのものに関しても、保健所の掲示板にある「売ります」「ゆずります」の中から見つけたり、フリーマーケットで買ったり、お友達から借りたりしているようです。その背後にはフィンランドのリサイクル精神があるからかもしれません。

そしてなによりも国から育児用品がプレゼントされます。育児用品がいっぱい詰められたダンボールのボックス自体が、底にはマットレスが敷いてあって、ベビーベッドに早変わりするくらいです。



これが育児用品がいっぱい詰まったベビーボックス

フィンランドのお産はこのベビーボックスなしには語れないほど有名です。これは妊娠中に受けられる手当てのうちの一つとされ、妊娠5カ月を経過した妊婦、かつ妊娠4カ月前に定期健診を受けた妊婦に Kela から無料で支給されます。無料と言えども、こうした優しい支給品や補助はフィンランドの高い税金でまかなわれています。

そして、このベビーボックスをもらいたいがため、妊婦は定期健診に出向くようになり、妊婦と胎児のリスクの早期発見、早期予防に貢献しているのです。さらに妊産婦と乳幼児の死亡率の低下にもつながっています。このベビーボックスは出産予定日の2カ月前に申し込まなく

てはなりません。また、条件を満たしていれば養子を迎えた親にも支給されます。

このベビーボックスの中には赤ちゃんの肌着、服、乳児用手袋、カバーオール、布おむつ、おむつカバー、防寒着、帽子、布団、靴下、おくるみ、毛布、シーツ、おむつ替えマットレス、保湿クリーム、ヘアブラシ、シャンプー、タオル、爪切り、温度計、おもちゃ、本など、赤ちゃんの必需品が盛りだくさん詰められています。色は女の子でも男の子でも着られるようなイエロー、グリーン、ベージュなどが中心です。さらに親が使うものとして、生理用ナプキンやコンドームまで入っています。

このように育児用品がいっぱいに詰まった国からのプレゼントでも、2人目、3人目となるともうすでに十分あるという人もいますし、自分で揃えたいという人もいるので、現金の支給もチョイスとしてあります。ベビーボックスに入っている育児用品は品質がよく、丈夫で長持ちするので、現金よりもはるかにお得とのこと。また、ボックスは子ども1人に対して1つ与えられるので、双子の場合は、ベビーボックスを2つ選ぶか、2人分の現金を選ぶか、ボックスを1人分現金を1人分ということもできます。

今回はフィンランドならではのサウナの暮らしを含む、妊娠中の過ごし方をお伝えいたします。